
すべてを撃ち抜くスナイパー

次郎長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すべてを撃ち抜くスナイパー

【Nコード】

N8502Y

【作者名】

次郎長

【あらすじ】

葬儀社、それは日本の開放を目的に活動する組織である。

その組織に属している男の話

第1話 葬儀社の男（前書き）

初投稿する次郎長と申しますものです。

投稿はゆつくりとしたペースになりますが、今後ともよろしく願
いします。

第1話 葬儀社の男

葬儀社、日本の開放を目的に活動する武装組織である。

この組織のボスは恙神 涯（ツツガミ ガイ）一、ガイの言い分としては「自分達は常に淘汰される弱者を 送る 側である」とは言っていたが実際意味が分からない。

ついでに言くと私、氷野 檉 次郎（ヒノカシ ジロウ）一がなぜ葬儀社にいるのかもよくわからない。

メンバーの制服も気に入らない、この服考えたのは一体誰だ？

文句を言いながらも一応葬儀社の一員として制服を着ているが・・・

・・・

いのりの着ている服だつて前がほとんど開いていて、見た感じとてもはしたない、私服のセンスは申し分ないのだが、葬儀社拠点であるのカッコはやめてほしい。

いい年した男どもがいるのだからあの恰好は毒だと思う。

そう考えていた私はいのりの服装を注意しようと思いついているのだがどこにもいない。

本部を数十分ほど探したところ、いのりがガイの部屋から出てきたところを発見した。

相変わらずの格好である。

「いのり」

「あ、次郎・・・何？」

「少し話がある、私の部屋まで来てくれ」

ちょうど例の服装をしているのでちょうどいい、柄ではないが少し説教をしなければ、

「分かった」

それだけ言い、私の部屋に向かいいのりはしっかりと後ろをついてくる、

それから少し歩き、私の部屋の前に到着する。

私の部屋のドアは声紋と指紋に認証されて開くので、私以外は誰も開けられないはずなのだが………

なぜか私の部屋で寝ている輩が3人いる。

しかもだ、部屋に置いてあるテーブルの上にはプリンが入っていたと思われる空の容器が大量に転がっていた。

寝ている輩の一人はツグミ、オペレーターの服装に身を包みのんきに爆睡中だ。

二人目は篠宮 綾瀬（シノミヤ アヤセ）一、アヤセは車いすに乗り食べかけのプリンを片手に持ちぐっすり寝ていた。食べている途中に意識が落ちたと考えられるな。

そして最後、アルゴだ。

アルゴが一番ひどい、アルゴはカーペットに寝そべり涎を垂らして部屋のカーペットを汚していた。

私は嫌な感じがしてすぐに冷蔵庫の中身を確認して愕然とした。

そう、大事に保存していた総数10個のプリンが全滅していたのである。

腹の底から煮えたぎるような怒りを冷静に抑え、冷蔵庫のミネラルドリンクを手に取り、500mlを一息に飲み干す。

「あの………次郎？どうしたの？」

いのりは私を困惑した表情で見つめる、

しかし私はそれを無視し、服装をいつもの黒いGパンとTシャツに着替える。

それからベッドの下に置いてある銀色のトランクケースとカバンを引っ張り出し、カバンの中に必要最低限必要な荷物を押し込めた、

「あれ………？次郎さん………？どこに行くんですか？」

アヤセは物音で目が覚めたようだ、しかし周囲の状況は目が覚めたばかりで把握していないようだった。

「アヤセ、ガイに伝えておいてくれ………今、この時をもつて私は葬儀社を抜けさせてもらうとな、それと部屋の物は全てアヤセの好きにしろ」

私は葬儀社メンバーの証である制服をアヤセに投げた。

「え！？ちよつと待って次郎さん！！」

アヤセは慌てて私を追おうとするが態勢を崩し転倒する。

「次郎………待つて！」

いのりは私の腕をつかみ引き留めようとする。

「………いのり」

私はいのりを見て頭をなでた。

「なんで………？葬儀社を抜けるって………」

「いのり、あの前がガバツと開けた服装はやめなさい、年頃の女の子なのだからはしたないぞ」

返事になっていない言葉を最後に私は一度、この葬儀社を去った。

数日後

ガイは途方に暮れていた。数日前に葬儀社の最古参である氷野樫次郎が理由も告げずに葬儀社を去ってしまったからだ。

ガイはその場にいた、いのり、ツグミ、綾瀬、アルゴに氷野樫が去った理由を聞いたが全く分からなかった。

いのりに聞いてみれば部屋の三人を見たら血相を変えて荷物をまとめ出し、制止も聞かずに去ったと言い、部屋にいたツグミ、アヤセ、アルゴに聞いてみたところ、

アヤセは目が覚めたら氷野樫は出て行くところだったと証言し、ツグミ、アルゴは寝ていて分からないと言っていた。

とりあえずガイはツグミに氷野樫の行方を搜索してもらっているが、状況は芳しくない。

しかも明日は鍵を奪取する作戦の予定であり、作戦参加予定の氷野樫がいないと氷野樫の援護を当てにしていた作戦はかなり厳しいことになる。

しかもこれからの作戦にも響いてくることだろう、

こんな処でガイは、葬儀社は止まるわけにはいかないのだ、

「なにがあつたんだ………次郎」

ガイは一人暗い部屋の中でうなだれた。

第1話 葬儀社の男（後書き）

初めての作品です。

質問、意見、感想がありましたらよろしく願います。

第2話 元葬儀社の男（前書き）

短い時間で二人の方に感想をいただきました。
本当にありがとうございます。

なるべくすべての人に返信して行きたいと思いますので、
感想、質問、誤字脱字の指摘等、お願いします。

第2話 元葬儀社の男

葬儀社を抜けてから3日間、私は旅館で静かな時間を過ごしていた。起きなくなったら起き、眠くなったら眠り、暇な時間は書店で買った本を読みふけ、旅館の運動場で汗を流し、名もなき男と卓球で火花を散らし、そして温泉に入る。

時たま老人たちと茶をともにしたり将棋を指したりした。ここでは時間がゆっくりと流れるようだった。

今日お茶を共にした御老人の夫婦は湯治に来ていたようで、ここは療養するのにちょうどいい場所だそうだ。

しかしずっとここに長居するわけにもいかない、長い時間同じ場所にとどまるとすぐにツグミに見つかってしまうからだ。

ツグミの本領はネットであり、この旅館は旅館で泊まった人間をほぼ全て紙媒体で管理しているために見つかる心配は少ないとはいえ、油断は全くできない。

同じ場所に留まるのは最高でも3日にしようと考えている。

そして今日がその3日目であり、名残惜しくもここを離れようと思う。

人が優しく、ご飯がおいしくて温泉があるなんて場所はなかなか見つからないのでここを去るのはひどく残念だ。

私はロビーに向かい受付にいた若旦那らしき人にチェックアウトする旨を伝える。

お金は前払いしていたので鍵を返すだけだ。

「はい、ありがとうございます、旅館のサイトにて登録を行い会員になれますと、特別に15%オフお値段を割引いたしますので、料金15%をお返しいたしますがどうなさいますか？」

「入ります」

即答して自前の携帯で、旅館のサイトに入り素早く会員登録を済ませる。

私は割引やお得、無料と言言葉に弱いのでこういうのはついついネットで登録してしまうんですよね。

「登録ありがとうございます、では値引き分のお値段をお返しします」

私はお金を受け取り、足早に旅館を出る。

「またのお越しを」

仲居さんに見送られ私は街に向かった、向かう場所は山を越えた先にある街に決めた。山を越える為の移動は基本は徒歩。

数少ない持ち物である銀のトランクケースとカバンはかなり重いのだが我慢するしかない。

自分の足で移動と言うのが最適だと思ったからだ。

郊外から離れた山の中を散歩するなんて事も少ないのでいい機会だ。第一にネットさえ使わなければツグミに見つかることなど……

……ない。

私はふと足を止め、冷や汗を流しながら本日自分が取った行動を思いだす。

朝起きて朝食を取り、軽く運動して汗を流したら温泉に入りいい気持ち……

昼食を取り卓球が異常にうまいお兄さんと勝負した後、御老人とお茶を飲みつつ将棋を指して……チェックアウト、……チェックアウト？

そういえば私はチェックアウト間際に割引と言言葉に釣られネットを使い会員登録をしました。

「……」

という事はまずいですね。

ネットを使ってから約30分、ツグミにかかれば携帯を開いただけでも場所が探知されてしまいますから急いで移動しないと捕まります。

早急に移動しようとした瞬間、少し離れた所からヘリの音が聞こえ

た。

「自分の性格が今回ばかりは仇となりましたか……」

私はカバンの中から黒いコートを出し羽織ると、道なりに走り出した。

「ガイ！！次郎の居場所を発見したわ！！」

ツグミは先ほど次郎が携帯の使用を確認し、ガイの元に報告に来た。ちょうど葬儀社のメンバーがほぼ集まり、明日の鍵奪還作戦について会議を行っている時であった。

「本当か！氷野樫はどこにいる？」

「街外れの森の中にある旅館からよ、旅館のサイトから会員登録したみたい」

ガイは顔に笑みを浮かべ自分の幸運を喜んだ。

あまり知られていない事実なのだが、氷野樫は儉約家で葬儀社の資産管理を任せていたので少しでもお金を浮かそうとする。

ガイは今回も氷野樫の性格に助けられた訳だ。

「六分儀はヘリを出せ！！いのりとアルゴ、それに綾瀬はついてこい！」

「ガイ！私も行くわ！」

ツグミは真剣な眼差しでガイを見た、ツグミはその場所にいた当事者だ。

少なからず責任を感じるのだろう。

「好きにしろ、遅れるな」

ガイたちは足早にヘリに急いだ。

他のメンバーたちは一刻も早く葬儀社の要、氷野樫の帰還を望んだ。

走ること数分、さすがに生身の体で、しかも重い荷物を持ちながらへりを振り切ることなどできない。

すでに追いつかれ、前にはへりとガイ、いのりに四分儀、後ろにはツグミ、アヤセ、アルゴがいる。

全員が俺を見つめている。少し気恥ずかしいですね。

いのりは今回ちゃんと葬儀社の制服みたいですな、関心関心。

それなのにツグミ、あなたの恰好はいただけません、オペレートをする時の服を外で着ないようにとあれほど……いや、やめましょう。

先に口を開いたのはガイだった。

「氷野櫛、なぜ葬儀社を抜ける。俺たちを裏切る気か？」

ガイは私を睨めつける、相当怒っているのか肩を震わせてまでいるようです。

「ふむ、別に私は裏切ったという感覚はありませんよ」

「じゃあ………なんで」

いのりは私を泣きそうな目で見る。その目は今のガイが私を見る目と少し似ている感じがします。

それにしても四分儀は相変わらずピクリとも表情が変化しませんね。怒っているのか、泣いているのか、それとも可笑しいのか、はつきりしてほしいものです。

「氷野櫛さん！！すいませんでした！！」

振り返るとアルゴが涙を流し頭を下げていた。

アヤセとツグミはアルゴの姿を見て、釣られて頭を下げる。

「アルゴ？」

「すいませんでした………多分、俺たちが何かへマしたから氷野櫛さんは怒って葬儀社を………」

「みんな頭を上げてください」

私はそういうとアルゴたちは顔を上げた。

「アルゴ、男が泣いていいのは親が死んだときだけです、それに・・・皆さんは何に対して私に謝っているのですか？」

四分儀以外の皆の顔が困惑した表情に変わる。

「えっと・・・私たちが部屋を汚したから・・・」

「アヤセ、私はその程度の事で怒りはしませんよ、もっと根本的なことです」

するとツグミはオズオズと発言する。

「もしかして、部屋を勝手に開けて入ったから？」

「それも違います」

「この間の訓練で・・・あまりいい結果じゃなかった・・・」

「いえ、いのりの訓練結果は素晴らしいものでしたよ」

皆は何のためにここにきたのでしょうか、これではヘリのガソリンと時間の無駄ですね。

もう少し私と言う人間を皆は知っていると思ったのですが残念です。

「氷野櫨、少しいいですか？」

「お、四分儀は私が怒っている理由が分かりましたか？」

とうとう期待のできる答えが来そうですね。

「これは信じたくありませんが・・・もしかして氷野櫨は我々葬儀社を見限ったのですか？」

嫌な空気が張り詰め、私はにやりと笑った。

そう、その答えこそ・・・

第2話 元葬儀社の男（後書き）

次回、氷野櫨 次郎が怒っている理由がわかります。

次回の投稿は未定ですが、皆さんは氷野櫨 次郎が怒っている理由
はわかったと思います。

感想の部分に怒っている理由を投稿してくださいますと、 をもれ
なくプレゼントいたします。
それではまたの機会に

第3話 裏切りか否か（前書き）

今回は表現が曖昧な部分が多々ございます。

感想、質問、誤字脱字、ご指摘等がございましたら感想欄にお願いいたします。

それと、2話の序盤部分に表現ミスがあるところご指摘いただいたので、書き直しておきました。

ご指摘してくださった零華さま、ありがとうございます。

第3話 裏切りか否か

「これは信じたくありませんが……もしかして氷野櫨は我々葬儀社を見限ったのですか？」

私は四分儀の質問を聞いてニヤリと笑う。

そう来たかと意表を突かれた気持ちでいっばいだ。

「次郎………本当なの？」

ツグミも私の表情を見て聞いてくる。

「………そう、その答えこそ………私が一番聞きたくない答えでしたよ、四分儀」

私は笑っていますがこれはきっと、色々な感情が交錯した結果なのでしょう。

今は表面上笑ってはいますが、うれしいとも、楽しいのも、可笑しいとも思っていないのですから。

「ガイ、今思うと葬儀社を抜ける時の私の怒りは非常につまらないものです。だってその時私が怒った理由はプリンを全て食べられたからですよ」

「は？」

その時ガイは非常に面白い顔をしました。クールな彼がめつたに見せない表情ですね。

他の皆も似たような表情をしています。

「じゃあ次郎はプリン程度の事で葬儀社を抜けるほど怒ったっていうの!？」

「はい、ツグミの言う通りです。私だって一人の人間ですし理不尽なことで怒りを感じ、その怒りで冷静さを失うこともあります。あの時の私は大人げなかったと後悔と反省はしていますが………」

私の行為は組織の人間としてはやってはいけない事の一つです。組織で地位の高い人間が怒りのあまり周囲が見えなくなり、どこかに

消えてしまつ。

これは子供の我儘以上に酷いものです。

「結局次郎さんは葬儀社に帰ってくれるんですか？」

アヤセは直球の質問を私に投げかける。実際このままのらりくらりと交わしたかった。

しかし先延ばしするのはあまり良くないことだ。

「そうですね．．．．．戻りたい気持ちはありますが、今は無理です」

よくない事だが、今は先延ばしにする以外の手はない。

私はコートの中に手を入れる。

「まずい！！誰か氷野櫨を止める！！」

ガイは気づいたようです。

まあ、理由もなく私が暑い中コートを着る理由なんてそうそうありませんね。

皆がガイの指示に一瞬遅れて反応した瞬間、私は服の中からスモーク弾の（．．）形を（．．）した（．．）閃光弾2つとスモーク弾を8つ取りだした。

閃光弾はピンを抜き後方と前方に投擲、同時にスモーク弾を四方八方に投げる。

直後、辺りには凄まじい音と閃光、そして煙が立ち込める。

皆の感覚、聴覚、視覚を封じ逃走を図る。目立つコートは素早く脱ぎその場に放棄、銀のトランクケースとカバンを持ち逃走を開始した。

山の中に逃げ込み、ついでにもう一個閃光弾を投擲しておく、現在私の耳と目の半分は見えず聞こえはしないがそれで十分、この程度の山なら走破は可能です。

私は仲間たちに心の中で詫びつつ街へ向かった。

その頃ガイたちは煙幕の中で混乱していた。

勿論ガイたちは素人ではなく、むしろ重火器のエキスパートなので、煙幕程度では混乱などしない、しかし氷野樫の手が悪質すぎたのだ。最初に氷野樫が投げたスモーク弾は、見た目は葬儀社のメンバーがいつも使っているスモーク弾だった、それを見たら誰もが煙幕を使い逃亡しようとするだろう。

しかし、それが凄まじい閃光と音を辺りにまき散らしたというのなら誰でも度肝を抜かれるだろう。

しかも最後に状況確認をしている所に止めの閃光弾、ガイたちが状況確認できるのはこれから15分たってからの事だった。

「うう………次郎め、悪質な手をお………」

ツグミは目を擦りながら氷野樫に対し悪態をつく。

他の皆も似たような行動をして、まだ動けそうになく煙幕には催涙効果もあつたようだ。

「これより葬儀社本部に帰還する、へりに乗り込め」

ガイは目を赤くしながらへりに乗り込んだ。

「待ってくれガイ！氷野樫さんは探さなくていいのかよ！？」

「どうやってだ？氷野樫はすでに山の奥深くに逃げ込んでいるだろう、このへりで追いかけてようにもどこに逃げたか見当がつかん、ガソリンと時間の無駄だ」

「素晴らしい判断、さすがですガイ」

そう言つて四分儀もへりに乗り込む、今の言葉には若干の皮肉が交じっていた気がしたが、あまり気にしてはいけない。

「しょうがないわよアルゴ、よく考えたら私たちが次郎を捕まえられるわけじゃない、足で追つてもへりで追つても無駄よ、無駄」ツグミも早々に諦めてしまったようだ。アヤセも納得はしていないようだ、ガイの命令ならば仕方ないと思ったのか、黙ってへりに乗り込む。

「いのり、お前はいいのかよ！？」

しかしアルゴは諦めきれないようで、いのりの賛同を得ようとする。
「次郎は・・・・・・・・・・『今は無理』って言った、だから待つ」
いのりもそれだけ言うとはりに乗る。

残るはアルゴだが、いのりの言葉に何も言い返せずにへりに乗った。
だが、葬儀社本部に帰還し氷野樫が戻らないという事は、鍵奪還作
戦の要が一人減るという事、これからガイたちはどうするのか・・・

次の日

まだ日の登り切ってはいない時間帯、私は未だに寢床を決められず
にいました。

葬儀社本部から一番近い街のほうが意外に見つからず、『灯台下暮
らし』と言うものではないかと考えてありましたが、電子機器をほ
ぼ使かっていない宿泊施設がみつからなかったのです。山奥の旅館
のように紙媒体での客の管理と言う非効率的なホテルなどあるわけ
もなく、なんと一晩公園のベンチで夜を明かす羽目になってしま
いました。

よく職務質問されなかったと、自分の幸運を喜びはしましたが一人
寂しく公園で過ごす夜は精神的に寒々しく、いつそのこと葬儀社に
戻っても、などと考える始末でした。

「そろそろ腰の落ち着ける場所は・・・・・・・・・・」

周りを見回すと橋の先に古びた建物を発見した。

近づいてみると今は使われていない大学の施設のようで、人の気配
はなさそうです。

「おじゃまします」

誰に言っているのか分からない挨拶を口走り建物に入る。建物内は
コケや緑に多少覆われていますが当分の生活は問題なさそうです。

少し探索してみるとしましょう。昔はこういう場所を見ると秘密基地だ何だと心が躍った物ですが・・・・・・・・・・どうやら先客がいたようですね。

部屋の壁際にはパソコンと段ボールが積まれており、誰かがここを使用しているようです。

本来ならば早々に退散すべきなのですが、少し興味が湧いてしまいました。

パソコンに近づき触れてみます。

「ほお・・・・・・・・・・」

画面が映り、鳥が飛び立つ風景が再生されています。

とても美しく心安らぐものを感じますね。

「どれどれ・・・・・・・・・・ほかに映像は・・・・・・・・？」

色々と操作してみると、この映像は作り掛けのようです。この映像の完成は楽しみですが残念ながらその暇はなさそうですね。

外に人の気配がしました。この建物は出口が一つしかなく恐らく窓ははめ込み式、身を隠すほうが最善ですね。

私は面倒を起こさないためにも、荷物を抱え電源盤の前にある段ボール箱に身を隠した。

第3話 裏切りか否か（後書き）

主人公の設定を見たいという方がありましたら、設定資料を掲載しようと思っております。

ご覧になりたい方は感想欄までお願いします。

第4話 少年との出会い（前書き）

皆様のおかげで4000アクセスを超え、57人の方がお気に入り登録してくださいました。
本当にありがとうございます。

第4話 少年との出会い

段ボールの中はカビ臭く埃っぽく、長い間放置されていたからでしょうかね。

大事な服が汚れてしまいました、もう少しいい隠れ場所があればよかったのですが、緊急事態ですし贅沢は言えません。

そして聞こえてきたのは誰かが足を引きずる音と………機械の駆動音？

どこかで聞いたような………

私は建物の中に入ってきた人物を見て驚きました。

赤い金魚のような服を着て、あの前がガバツと開いた服を着た少女、いのりが腕を怪我して入ってきたからです。

後からふゅーねるも入ってきますが、足が壊れているようです。

一応私は救急道具を携帯していますので、今出て行って助けてあげない事もないのですが、今いのりの前に姿を現すとガイたちに連絡を取られてしまう可能性もあります。

これは悩みどころです、あの程度の怪我ならいのりでも大丈夫かもしれないませんが………

その時です。私の目の前でとても困ったことが起きてしまいました。なんと、いのりが服の上部分を脱いでしまったのです。

誰もいない建物だからといってそれはまずいのではないのでしょうか？ しかもいのりのはのんきに歌を歌い始めてしまいました。困った物です。

まあいいでしょう、ですが再びの危機のようです、誰かがこの建物の中に入ってきたようです。

足音は一つですがいのりは気づいていないようです。

「しょうがないですね………」

無意識に私はそう呟くと、カバンの中からハンドガンを取り出し残弾数を確認。

一人ぐらいなら問題ありませんね。

私はハンドガンを構え、すぐに撃てるように準備をしました。しかし入ってきたのは少し予想外な人物でした。

多分普通の学生でしょうか？弁当箱を思しき物を片手にいのりの姿に驚きつつ近づいていきます。

思春期の少年なら仕方がないとは思いますが、半裸の少女を見つめるのは失礼かとおもいます。人の事は言えませんが……少年は足元に注意が言っていないようで、足元にある空き缶に気づかず蹴とばしてしまい、辺りには大きな音が鳴り響きます。いのりは素早く反応し素早く前を隠すと、ふゅーなるは少年の足に紐を射出し足元をすくいました。

「うわぁっ!？」

少年は見事に転倒し、弁当箱の中身をぶちまけていますが、この反応からするにG・H・Qの人間ではなさそうです、少し安心しました。

「あ! !あの……! !違って! !そんなつもり全然なくて! !」

何が言いたいのか全く分かりませんね、少年の弁解もむなしく、いのりも警戒心をまったく解いていません。

少年は弁当を拾うと、再びいのりに近づきます。

「君もしかして! !？」

いのりが後ずさりして机にぶつかり、その衝撃でPCが起動してしまっただようです。

私が見たあの映像が流れていますね。

半分予想が出来ていましたが少年がここの先客のようです。

「ま、まだ途中なんだよ! !僕の故郷の景色」――

「綺麗」

「え……?」

これが青春の1ページと言う物でしょうか？傍から見ると悪くはない雰囲気だとは思いますが――

ぐう~~~~~

いのりのお腹は色々な意味で自重すべきです。
さすがのいのりも恥ずかしそうに顔を赤らめますが、少年は優しくおにぎりを進めているようです。私もお腹が空きました。

15分後

二階？に移動したいのりと少年は、何か話しているようですが何を話しているのか聞こえにくいですし、私の一からでは見えにくいです。

一体何をしているのか気にはなりますが………また誰か来たようです。

それも大勢、10何人の単位でしょうか？

私が気付いた数秒後に大量のG H Qの兵隊たちがなだれ込んできました。

しかも一人階級の高そうな禿げ……ではなく、サングラスをかけたスキンヘッドのおじさんもいますね。

いのりはすぐさま逃げようとしますが、残念ながら腕を掴まれてしまいました。

しかも兵士はいのりに銃身で打撃を与えます。

「学生か？」

「は、はい！あの……その子怪我してるんです、出来れば――」

「この女は犯罪者だ、庇うなら君も同罪として浄化処分するぞ？」

近くにいた兵士二人は少年に銃を向けます、相変わらずG H Qは腐っていますね、さすがに私も限界がありますよ……………」

「データ照合の結果は……？」

「六本木の葬儀社の一員に間違いありません」

「ふっ……テロリスト風情が!!」

ハゲはいのりの顔をけり上げ、部下に連行するように指示すると、引き上げていきました。

あの男はあとで報復させていただきましよう、顔も覚えましたしね。
・
・
・
・
・
・

「こんな俺でいいのか……」

情けないことに暴力の危険から解放されて、少しホッとしていた。その程度だ、僕は。

所詮彼女を相手にできる格じゃなかった。

僕はあやとりで「取って?」と言った彼女を思いだし、涙を流した。取りたかった、あの子に近づいて手を触れたかったよ。

だけれども、もう忘れよう……。しばらく休めば心が回復する。

そしたらまた……。いつもの僕に戻ろう。

そう思った時だった。

「少年!いのりを助けたいですか?」

突如声が聞こえ下を見ると、段ボールに埋もれた男が銃を片手にこちらを見ていた。

その男の髪の毛や、白いTシャツ、黒いズボンは埃で汚れていて、風体はまるで浮浪者だった。

「あなた誰ですか!?!」

「私ですか?通りすがりのスナイパーですよ」

明らかに怪しい、絶対に関わってはいけない人種だ。

「こ、答えになっていません!」

「それもそうですね、私は……。ひとまずアイスマンとお呼びください」

「アイス……マン？」

絶対に偽名だ。

「そうです、あなたは……？」

「桜満 集です、桜が満ちて集まると書いて桜満 集」

「シユウ……いい名前です、では再度問います、あなたはのりを助けたいですか？」

「当たり前だ！！でも……力がない」

「では、私が手を貸しましょう、条件付きで」

何を言っているんだこの人は？さっきまで隠れていたくせにのりを助けるだって？

僕を馬鹿にしているのか？

「ふざけるな……じゃあ何で隠れていないでいのりを助けなかったんだ！」

「その時ではないからですよ、そして今がその時です」

本当にふざけた奴だ、でも……見捨てたくない……

僕の決断は

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8502y/>

すべてを撃ち抜くスナイパー

2011年12月3日01時45分発行